

憶良「少年行」

中 西 進

—

山上憶良に「哀世間難住歌一首 井序」(580四―五)という作品がある。一読、世間の無常を哀しんだ歌とみることのできる作だが、憶良は、世の中が須臾の間に過ぎて、やがて人間は老を迎え、手束杖を腰にたがねて、あっちへ行けば人から嫌われ、こっちへ行くと人から悪まれる、老人というものはこうでしかないらしいと歌い、「たまきはる 命惜しけど せむ術も無し」ということばでこの一篇を結んでいる。ここに非常に苛酷なりアリズムがあることは、井村哲夫博士が述べられたとおりで、「令反感情と哀世間難住歌」『憶良と虫麻呂』 とういう表現にわたしたちは激しく震撼させられるであろう。憶良作品については、井村博士のみならず、村山出氏

もすぐれた研究の成果を公表され(『山上憶良の研究』、下田忠氏の研究(『山上憶良長歌の研究』)など、多く見受けられる。もちろん、憶良の研究は古く江戸時代からあり、ここで考えようとする「哀世間難住歌」と中国文学との関連についても契沖の『万葉代匠記』の中に、いろいろな指摘がある。例えば「真玉手の 玉手さし交へ」には、初唐の『遊仙窟』の「相思枕留与十娘。以為記念詩曰。聊将代左腕長夜枕渠頭」との類似(初稿本・精撰本)、「世の中の術なきもの」には『文選』の「書」の分類中に見える孔文举の「論盛孝章書」の「歲月不居、時節如流」との類似などを指摘(精撰本)、老人の杖にも『礼記』(檀弓)の「孔子蚤作負手曳杖逍遙於門歌曰」との類似(初稿本、精撰本)や『史記』(孔子世家)の「孔子病、子貢請見孔子、方負杖逍遙於門」との類似(初稿本)、

『文選』所収の劉越石の「答盧諶詩序」の「負杖行吟則百憂俱至」との關係（初稿本、精撰本）が指摘されている。

近年に到っても小島憲之博士が『抱朴子』（論仙篇）の「百憂攻其心曲、衆難萃其門庭」をこの長歌昌頭の部分の典故としてあげておられるが（『上代日本文学与中国文学』とくに井村博士は仏典における老を指摘され、『涅槃經』（聖行品）をあげるほか、部分的にも、「ももくさに……」の部分に『雜阿含經』（卷三五）、老醜を述べた部分に『仏本行集経』や『大般涅槃經』、「紅の面の上に……」の部分には『仏本行集経』を指摘された。

こうして先学の貴重な研究はこの作品と中国文学との關係の深さを明らかにしているのだが、しかし契沖らの研究は部分的な語句に中国文献の踏襲があるかもしれないことを指摘したものであった。別にこの作品の特質を述べたわけではない。その点井村博士が仏典を紹介されるのは、この作品が仏典とひとしい思想や関心の中でよまれたとする主張を可能にしよう。勝手に拡大していえば、世間無常をとく仏典と、ひとしい作だということもできるであろう。

二

こうした先行諸論に対して、わたくしには次のごとき

問題点を指摘し得るように思われる。それは「少年行」と題されるところの中国の作品群と「哀世間難住歌」とが關係をもつのではないかということである。むしろ、憶良は「少年行」を基にして、いわば「擬少年行」としてこの「哀世間難住歌」を書いたのではないか。

「少年行」とは、青春の歡樂を歌い過ぎ去った青春を惜しむ型の「樂府」体の詩である。後の中唐の白樂天の詩に「背燭共憐深夜月、踟躕^{（たぐ）}花同惜少年春」（『春中与盧四周諒華陽觀同居』『白氏文集』）という有名な文句があり、『和漢朗詠集』にも取られているが、こうした「少年」は先立っても中国の詩に多く見られるものである。

そもそも中国では詩の中で壮年と老年とを対比させつつ詠む習慣が多い。およそ、老を非常に強く文学的な主題として意識するのが中国の詩人ではないだろうか。例えば『芸文類聚』に、「貧」などとともに「老」が分類目として存在しているものもそのことを示しているが、この類書の中に老を壮と対比させながら詠む詩が多く見受けられる。その一つとして、魏の庾璿の、

少壯面目沢 長老顔色羸 羸醜人所惡 拔白自洗蘇
〔新詩〕『芸文類聚』中文出版社。『全三国詩』は「雜詩」三首中の一とする。

がある。若いころには顔色には艶があったが、老いて顔

色が羸(あらいこと)となつてしまい、羸醜は人から悪まれるところとなり、よつて白髪を抜き、顔を洗つて若返るのだという。「羸醜人所惡」は憶良の「か行けば 人に厭はえ かく行けば 人に憎まえ 老男は かくのみならず」といった表現をまざまざと連想させよう。また同じ魏の阮瑀の、

白髮隨櫛墜 未寒思厚衣 四支易懈倦

行歩益疎遲 常恐時歲尽 魂魄忽高飛

自知百年後 堂上生旅葵 (『失題詩』『芸文類聚』)

の「四支易懈倦」は、憶良の「沈痾自哀文」に「四支不動、百節皆疼」というのと同じく、年老いて手足の疲れ易くなることをいうもので、道を歩いても次第にゆっくり歩むようになり、歳月が尽きて生命が忽ちに終わることを常に恐れるのだという。また、万葉集の中に「潘江陸海」とも評される晋の陸機の作では、

軟顔収紅藥 玄鬢吐素華 冉々逝將老

咄々奈老何 (『失題詩』同右。『全晋詩』では「詠老」)

と詠む。「軟顔収紅藥」は、憶良の「何処ゆか 皺が来たたりし」と同じであり、軟顔はかつての紅藥(紅色のシベ)を収めてしまい、黒い鬢も白髪となったという。陸機は他に「百年歌十首」と呼ばれる作品も作っており、これは十歳から百歳に及ぶ歳月の変化を年令の上で考えると

いった、いわば十行詩である。その他にも、同じく晋の張載は、

氣力漸衰損 鬢髮終以皓 昔為春月華

今為秋日草 (『失題詩』同右)

と詠む。氣力は次第に失われ、鬢髮は終に白くなつてしまったとうたい、昔は春月の華の如きであったが、今はその面影もなく、ただ秋日の草の如きだという。そして梁の孔叢も、

盛年歌吹日 顧歩惜容儀 一朝衰朽至

星々白髮垂 (『老詩』同右)

と、盛年の時に歌を口ずさむも、一朝にして老が至り、年々に白髪が垂れてくると詠み、同じ梁の范泰も、

在生竟何予 未云倏已老 華髮飄悴容

苦慮栖懷抱 疇昔少年時 皆以婦大造 (『失題詩』同右)

と歌っている。「華髮飄悴容」など、まさに苛酷なりリズムといつてよいだろうが、また憶良が年少ころの紅顔と老年の悴容とを対比的に語る点は梁の簡文帝の、

昔類紅蓮草 自玩綠池辺 今如白華樹

還悲明鏡前 (『失題詩』同右)

とひとしい。

このように、『芸文類聚』の「老」の分類には壯と老

とを対比させつつ少年の日を惜しむ詩が多く見られるのだが、その他陶淵明にも「采木并序」の詩があつて、その序に「采木、念将老也。日月推遷、已復九夏」と記すように、やはりこれも歳月が移つて行くことを詠んだものであつた。陶淵明の作品と万葉集との影響関係は認め難いとする意見もあるが、わたくしは淵明の作品は強く万葉集に影響を与えていると思うのであり、この「采木并序」もそうした一つだと考える。

このようにみてくると、中国詩の中で、老が大きなテーマとなつてゐることを確かめ得るであらう。その他の詩にも、もちろん歳月の流れ去ることを詠む詩は多くあり、「樂府」の中にも「歲月如流邁、春尽秋已至。歲月如流邁、行已及素秋」(『樂府詩集』卷四五)のような詩があつて、そうした詩をも含めると非常な数になるであらう。

また、憶良の「哀世間難住歌」には「手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ かく行けば 人に憎まえ」と「手束杖」を腰にたがねる表現があるが、杖をつくことよつて老を象徴することは大変重要な意味をもつ。すなわち、立てるか立てないかに憶良はこだわつており、「沈痾自哀文」でも「布に懸りて立たむと欲すれば、翼折れたる鳥の如く、杖に倚りて歩まむとすれば、

足跛ける驢の比し」という。二本足で立つという、人間だけしかできない行動に非常に深い関心を注いだのが憶良だとすれば(拙著『谷蠟考』)、憶良は人間の尊厳ということについていつも考えていた詩人であることとよく話が合うであらう。憶良における人間への信頼は非常に強いものがあり、「貧窮問答歌」も人間への尊厳を汚されるありさま、つまり人なみに自分が仕事に励んでゐるのにそれができないということへの悔恨が強くでている。そういうものと「杖」にここで注目することは一連の事柄である。『礼記』の記すところによれば、

五十杖於家。六十杖於郷。七十杖於國。

八十杖於朝。(内則)

とあつて、こういう杖によつて老を区別する方法は憶良の認識と通うところがあらう。

三

以上のようにみてくると、老と壯とを対比して考え、また、老を杖によつて象徴させる憶良の作品が、老を問題にする中国の文章あるいは詩と非常に近い関係にあることがしだいに明らかになってくる。そこで、憶良のこの作品はそういう面から読んで見なければならぬのではないだろうかと思われる。

さらに、老を大きな主題として考える、ちよとどそれの裏返し表現が、「美婦人」という項目を『芸文類聚』の中に見たり、『初学記』の中に「美丈夫」「美婦人」などの項目を見出したりすることであろう。何が美しいかということとは、何が醜いかということの裏返し表現だから、「老」を問題にするのと同じ関心の中で、「美婦人」や「美丈夫」への関心が出てくるのであろう。だから、「美婦人」について見ることもまた、この作品を理解するうえに有効になるはずである。この予想通り、憶良の作品と似たような描写をそれらの中に発見することができる。例えば、魏の曹植の作品に「美女篇」があり、ここに、

美女妖且閑 採桑歧路間 柔条芬冉々
葉落何翩翩 攘袖見素手 皓腕約金鐲
頭上金雀釵 腰佩翠琅玕 明珠交玉体
珊瑚間木難 羅衣何飄飄 輕裾隨風遠
顧盼遺光彩 長笑氣若蘭 行徒用息驚
休者以忘餐 (『美女篇』『初学記』鼎文書局)

と見える。この「皓腕約金鐲」は「唐玉を 手本に纏かし」の描写と同じであり、頭上には金雀の釵(かんざし)を差し、腰には翠の琅玕を佩き、美しい玉はきれいな体にちりばめて付けているという。そして、うすものの衣

が風にへんばんとひるがえる(「羅衣何飄飄、輕裾隨風遠」という描写は、憶良の「白袴の 袖ふりかはし 紅の 赤裳裾引き」(或云)という描写と同類のものと思われる。このようなものの対極のものとして、老を詠むのである。

ところで、こうしたことの全体が、集約的に出てくるのが陳の沈炯の「長安少年行」である。これは長安の都における年若い男子が主人公であり、主人公を同じくして沈炯以外にも「洛陽少年行」や「邯鄲少年行」などの作品が作られることは言うまでもない。

「長安少年行」といえば、盧照鄰の「長安古意」(『全唐詩』)がここに思い出されるが、かつてわたくしは盧照鄰という詩人の精神構造が憶良と非常に似ているのではないかということを書いたことがある(『長安の憶良』『万葉史の研究』)。盧照鄰は華美、華麗を極めた長安の街の真中において、そういうものを一方で好ましいものと思いつつ、しかし一方で軽薄さに激しい憤りを感じるのである。都会の俗なるものに対して、憶良という作家はうまく対応できなかったといえるが、盧照鄰は憶良に輪をかけて世渡りが下手で、二人はともよく似ている。その盧照鄰の作品の中に「長安古意」があり、実はこの中に沈炯の「長安少年行」が影響を与えているように思われ

る。つまり「長安少年行」のことは「長安古意」の中にも見える。一般的なことはあるが、「長安好少年、驄馬鉄連錢」の表現が「長安古意」の中でも「妖童宝馬鉄連錢」と使われ、おそらくその影響を受けているのであろう。

さて、ここに「長安少年行」の全文を掲げよう。

長安好少年	驄馬鉄連錢	陳王装腦勒
晋后鑄金鞭	步揺如風燕	宝劍似舒蓮
去來新市側	遨遊大道辺	道辺一老翁
顔鬢如衰蓬	自言居漢世	少小見豪雄
五侯俱拜爵	七貴名論功	建章通北闕
複道度南宮	太后居長樂	天子出回中
玉輦迎飛燕	金山賞鄧通	一朝復一日
忽見朝市空	扶桑無復海	崑山倒向東
少年何仮問	顔令値福終	子孫冥滅尽
郷閭復不同	涙尽眼方暗	髀傷耳自聾
杖策尋遺老	歌嘯詠悲翁	遭隨各有遇
非敢訪童蒙	〔全陳詩〕	〔全漢三晋南北朝詩〕

芸文印書

館)

ここに見る、長安の若々しい少年たちが馬に乗って得意そうに歩く姿については「哀世間難住歌」の中でも、

「劍太刀 腰に取り佩き 獵弓を 手握り持ちて 赤駒

に 倭文鞍うち置き はひ乗りて 遊び歩きし」と歌われているのと同じ状態である。あるいは、「步揺如飛燕 宝劍似舒蓮」とは、步揺は飛燕のごとく軽やかで、立派な劍を帯びた姿は花びらの開いた蓮に似ているという。こうした状態で「去來新市側、遨遊大道辺」というのは、憶良が赤駒に倭文鞍を置いてはひ乗って大道を遊びあるくと歌う状態と、同じ事柄をのべたところである。

「長安少年行」はこのあと道の辺に一人の老人に遭うが、その老人は「道辺一老翁、顔鬢如衰蓬」だといふ。彼の顔や鬢は衰えた蓬のようだといふ、その老人がいつかに年を取って来たかをのべるが、「一朝復一日、忽見朝市空、扶桑無復海、崑山倒向東、少年何仮問、顔令値福終」「子孫冥滅尽、郷閭復不同、涙尽眼方暗、髀傷耳自聾」と、肉体的な変化が詠まれる。そして、「杖策尋遺老、歌嘯詠悲翁、遭隨各有遇」と、わずかに遺っている老人をたずね、歌をうそぶき悲しい翁をうたうのだといふ。そして、人々に遭うとその人その人によってそれぞれの出逢いが違うといふ、「非敢訪童蒙」といふ。つまり、決して若者を訪ねようとはしないといふのであり、遺老のみを訪ねるのである。これは憶良の「か行けば人に厭はえ かく行けば 人に憎まえ 老男は かくのみならず」を容易に想像させることだろう。

このような内容をもつのが沈炯の「長安少年行」という作品である。これは全体の構成や描写が憶良の「哀世間難住歌」とひとしい。すなわち「哀世間難住歌」一篇を、憶良における「少年行」といってもよいのではないか。

四

そうすると、中国の漢詩における種々の老を念頭に浮かべながら同じく少年行を書く憶良の意識というものを、考えざるを得ない。万葉集には他にも老を歌う歌はある。例えば、巻十に「歎旧」（二八八四）のあることは周知のとおりであろう。しかし、これは「野遊」「詠煙」などとならんで出てくるもので、こうした老を歌う歌は、憶良の老を詠む作品とは基本が違ふ。柳田国男は「歌垣」の中で老人の歌がうたわれるといい、それを裏付ける資料は古代歌謡や万葉集の中にも見えるが、これは柳田国男がいう「我も昔は男山」式の歌であり、今は老人だが昔は男盛りだったのだという内容の歌である。つまり、歌垣の主役を演ずる若者に負けまいとする趣のかけ合い歌なのである。

あるいは、人麿歌集に出てくる、

梯立の倉橋川の石の橋はも 壮子時にわが渡りて石

の橋はも（七二二八三）

のように、青春の回想を歌うものもある。こういうものも、歌垣という場を基にして出てきた歌である。そういう多分に性的な土着の祝祭の中で、むしろ若さを謳歌する歌と、いま憶良の歌おうとしている老とはまったく異質ではないか。なぜなら、憶良は人間において老年とは何かということを考えた。そういう人間へのまなざし、

——そのまなざしは非常に成熟したまなざしだと思われるが、それをいま人間の上に向けてこの作品を作っているのである。それと男山式の歌とはレヴェルの違いというよりも、あい容れない種類の違いがあるではないか。男山式のもの、自然発生的なものではないかとわたくしは考える。人間、放っておいても自然に青春を懐しみ、年老いたことを歎くのだが、しかし、そういう感性的なものではなく、これは知識に基づいて思索という行為をたどって、老とは何かを哲学的に考えたものである。そういう時に老とはこういうものだ（老男はかくのみならし）という、抽象化した表現が出てくるのだと思われる。

なるほど、憶良の「少女らが 少女さびすと 唐玉を手本に纏かし」が五節の舞姫の描写と似ていることが古くから指摘されている。それはそれとして正しいし、憶

良がもう一つ土台として古来の日本の伝統を踏まえていることも事実だろう。しかし、それは詞句を借りるという程度にとどまる。先に中国詩文の類似句の指摘を紹介したが、それと同じ程度の問題にすぎない。

人間が老いを考える場合、それはかなり社会的な問題だろうとわたくしは考える。あるいは、社会という人間の組織が内部的に成熟して来た時に、老人問題が顕在化してくるのではないか。それがこれの作られた神亀天平時代で、この時代はまた社会の高齢化も進んでいたであろう。そういう社会的な成熟度の中で出て来た発想が、こうした「老」を考える作品となった。

この作品が嘉摩郡において作られたことにも、一つの必然性がある。つまり憶良自身にとっては惜春の「少年行」だったが、はからずもここで提示された問題は、人間の避けがたい老であった。これが避けがたい運命だとすれば、人間いかになすべきか。むしろ積極的に老を尊び、老人を過去から救い出して今日的に位置づけることしかない。その倫理を説くことが、行政官としての筑前守には必要であった。そこに、この作が「業をしまさに」(八〇一)や「勝れる宝子に及かめやも」(八〇三)と並んで、嘉摩郡において作られる必然性があった。

この、老を嫌うという現実を原点としてつと老を尊ぶと

いう帰結は、はからずも例の「竹取翁」の歌を思い出させるであろう。卷十六に載る「竹取翁」の歌(16三七九—三八〇二)には憶良が手の加わっているであろうとかつて考えたことがある(「竹取翁歌の論」『万葉集の比較文学的研究』)。その中にも中国風な服装が出てくるし、先の「少年行」のような若者の描写も多く出てくるが、どうやら、語句の一致だけを云々すべきではないようである。まさに歌垣的な棄老の場から尊老へと展開してゆく過程が当面の「哀世間難住歌」の言外とする部分を補足するであろう。「竹取翁」の歌がより自然発生的な世界になじんでいるのに対して、こちらの方はもう一方の思念的な提示をしたもので、両々あい俟つべき一貫性が憶良の二つの作品には見られるのである。

付記 本稿は小樽商大における講演のテープをもとに、編集委員辰巳正明氏が起稿してくれたものに、講者が加筆したものである。氏の厚意に深謝したい。